

・2018 年

口腔機能低下症の検査と診断—改訂に向けた中間報告—

上田ら. 老年歯学. 33: 299-303(2018).

要約：口腔機能低下症の項目ごとの低下該当率や、年代ごとの診断割合からの中年期からの対応の必要性、口腔機能低下症とオーラルフレイルの概念等について言及。

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsg/33/3/33_299/_article/-char/ja)

咀嚼能力の維持・向上を期待した簡便なトレーニング

中澤ら. 老年歯科医学. 33: 63-69(2018).

要約：健常な後期高齢者を対象に、ガム噛みトレーニングを 30 日間実施した結果、咀嚼能力及び身体機能（開眼片足上げ）の有意な向上が認められた。ガムトレーニングが優れた機能訓練方法であることが示唆された。

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsg/33/2/33_63/_article/-char/ja/)

Relationship between masticatory function and frailty in community-dwelling Japanese elderly（日本人地域在住高齢者における咀嚼機能とフレイルの関係）

Y Horibe et al. Aging Clinical and Experimental Research. 30: 1093-1099(2018).

要約：高齢者 747 名を対象に咀嚼機能（最大咬合力，混和能，自己申告咀嚼能）とフレイルの関係を評価。3 つの咀嚼機能はプレフレイルあるいはフレイルと関連することが示された。

(<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/29285733/>)

Relationship between occlusal force and falls among community-dwelling elderly in Japan: a cross-sectional correlative study（日本の地域在住高齢者における咬合力と転倒の関連性：横断的相関研究）

M Eto et al. BMC Geriatr. 18: 111(2018).

要約：65 歳以上の高齢者 159 名を対象に咬合力と身体機能を測定し、転倒との関連を評価。咬合力は身体機能と相関し、咬合力と転倒経験は有意に関連があった。定期的な咬合力の測定は高齢者や保健師の転倒予防・予知に対する意識向上に寄与する可能性がある。

(<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/29743029/>)

The effects of gum chewing while walking on physical and physiological functions (歩行中のガム咀嚼が身体的・生理的機能に及ぼす影響について) .

Y Hamada et al. J. Phys. Ther. Sci. 30: 625-629(2018).

要約：健全な成人を対象に歩行中のガム咀嚼の影響を評価した結果、対照試行と比較し心拍数が増加し、40歳以上の中老年男性では、歩行距離、歩行速度、歩数、エネルギー消費量が有意に増加した。

(<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/29706720/>)

Maximum Occlusal Force and Incident Functional Disability in Older Adults: The Tsurugaya Project

(高齢者における最大咬合力と機能障害罹患：鶴ヶ谷プロジェクト) .

T Ohi et al. JDR Clinical & Translational Research. 3: 195-202(2018).

要約：70歳以上の高齢者815名を対象に咬合力で四分位群に分類し中央値7.9年間追跡した結果、残存歯数などの交絡因子とは無関係に咬合力が低いことが身体機能障害のリスク増加と関連した。咬合力は、口腔機能と高齢者の健康との関係を示す有用な指標となる可能性が示唆された。

(<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/30931768/>)

Occlusal force is correlated with cognitive function directly as well as indirectly via food intake in community-dwelling older Japanese: From the SONIC study (地域在住の日本人高齢者において、咬合力は認知機能と直接的に、また食事摂取を介して間接的に相関している：SONIC研究) .

K Ikebe et al. PLOS ONE. 13: e0190741(2018).

要約：高齢者1962名を対象に咬合力と認知機能（モントリオール認知機能評価（MoCA-J））の関連性を評価した結果、関連する因子で統制したうえでも咬合力は食事摂取を介した間接的な関連のみならず、直接的に認知機能と正の相関が認められた。

(<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/29304177/>)

A 5-year longitudinal study of association of maximum bite force with development of frailty in community-dwelling older adults (地域在住高齢者における最大咬合力と虚弱の発現との関連についての5年間の縦断的研究) .

M Iwasaki et al. Journal of Oral Rehabilitation. 45: 17-24(2018).

要約：ベース時に75歳の高齢者322名の最大咬合力(MBF)を指標に5年間追跡によるフレイル発生を評価。MBFによる3分類の上位からの虚弱HRは1.00、1.27、2.78であり、MBFの低下は虚弱の発症リスクを高めた。

(<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/28965370/>)